六花
RIKWA
5
俳句雑誌りつか
２０１５（平成２７年）
cover design Yuna Mizuno

今（こん）さくら　山田六甲

スカーフの黄を結びある夕桜
散りながら夢に入りゆくさくらかな
ぼんぼりを包みてゐたる花の闇
指入れて帯をしめをり花衣
花ミモザ入れある文のことをふと
直感はいつも間違ひ花逢瀬
花散るや死んでも逢へる保障なく
人妻は手櫛に花を梳きにけり
鉛筆に花のしづくを伝ひとる

作用町桜山亀田邸・下桜不二男の郷里三句

空に入るG線上のさくらかな
空耳にあらず蛙の鳴く棚田

PDF= 俳誌の salon

蛙鳴く水の瞼の上に天

弟と肱川に文鳥の句碑を探して見あたらず

花筏石も流転をまぬがれず

母は九六歳にしておだやかな人になっていた

花筏落ち着く石を得たりけり

小学時代の同級生Ｓ君に面会

新緑の竜王城を並び見し

熟田湯(にぎたゆ)の二階に浴衣そろへあり

春落葉一つ悟れば一つ降り

藤の風あは紫に匂ひけり

時かけて牡丹二つ散りあへる

人という鬼に出会(でくは)せ蛇すくむ

PDF= 俳誌の salon

雪嶺抄　登り窯　笹村　政子

遠天に雪の嶺あり登り窯

蛇窯より見上げし山の笑ひ初む

春しぐれ蛇窯の叶のあかるくて

早春の日の差しゐたる蛇窯かな

春寒く窯場の薪の匂ひけり

休み窯浄めの皿の春ぼこり

春ショール巻き直しては覗く窯

春耕の前にうしろに鳥のこゑ

水中に水の流れや春立つ日

稜線の淡むらさきに春の山

PDF= 俳誌の salon

雪郷集

金星　　出口誠

鴨泳ぐ流れに首を入れながら
早春の夜の風呂場にひとり居る
長長と沸くまで待ちて春の風呂
それぞれの時間の過ぐる春ごたつ
春の宵金星のみの見えてをり

牛　　貝森光洋

春深し牛の瞳眠りの国の中
蹴りたがるサッカーボール春の暮
コーヒーを重く挽いてる余寒かな
切株の根本に残る春の昼
天地のボール遊びか告天子

PDF= 俳誌の salon

雪郷集

煮凝

佐津のぼる

煮凝の琥珀に箸のすべりけり
夜更けまでかかる脱稿膝毛布
雛飾る箪笥の位置を妻と変へ
妻の顔雛の鏡にうつりけり
吸物の貝の口あくひひなの日

丹波

升田ヤス子

冬山に貼りつきゐたり登り窯
陶器屋の玻璃の向うに辛夷の芽
頬赤し釉(ゆう)にかがやく陶(すえ)の雛
捨て甕(がめ)を魚礁に水の温みけり
春草の莫蓙の形に潰(つい)えけり

PDF= 俳誌の salon

夢風撰巻頭

春潮や殻の貼りつく澪標

松本文一郎

しゅんちょうやからのはりつくみおつくし　まつもとぶんいちろう

寒雀銃の的とは過去のこと

蠟梅や小悪魔となり溶かまほし

春潮や殻の張りつく澪標

水脈を引く上り下りや水温む

鳥帰るわが故郷は北つ方

春は潮の干満の差が激しい。この澪標は不断海水に隠れている個所が大潮で水位が大きく下がり、貝殻が付着しているのが見えた。空気に触れて白く乾いて眩しい。貝は潮に流されぬようしっかり貼り付く構造をしているが、逆に素早く逃げることが出来ない諸刃の剣。大潮は命にかかわる出来事である。この季節は潮干狩の獲物に蛤や浅蜊がよくとれ味も良くなるので、春の季語になっている。この句も遠浅になり間近に見た澪標かもしれぬ。因みに澪標とは舟の安全航行のために深いところと浅いところの目印に設置されている標識。

PDF= 俳誌の salon

夢風撰巻頭

鶯や恋が芽生える距離にあり

溝渕　弘志

うぐいすやこいがめばえるきょりにあり　みぞぶちひろし

春の雪新調の服濡れにけり

水仙の一輪活ける駅舎かな

鶯や恋が芽生へる距離にあり

絶壁に水仙の群れ咲いてをり

靴破れ袖も綻び卒園す

恋が芽生える距離というのは一体どのくらいの距離をいうのだろう、と読者は想像をめぐらす。その距離は鶯と主人公の間くらいの距離なのか。鶯を称して「声はすれども姿が見えぬ」というように、見える様で見えない距離であり姿なのが恋だ、と言わんばかりの決めつけが面白い。「無駄だとわかってやめられるのなら恋わずらいとは呼ばないのよ、ボク。夢だとわかって目が醒めないから夢中と呼ぶのよ」と中島みゆきさんは言う。恋も五里霧中でよく分からない距離がいい。恋はホの字のホーホケキョリ。芽生えるは物事の始まりでもある。

PDF= 俳誌の salon

雪樹集

風花

住田千代子

節分の豆を数へるひとりの夜
蛸壺の転がってゐる焚火かな
マスクして将棋指す目の鋭かり
風花に路地を塞かれゐたるかな
風花の漂うてゐて地を知らず

春浅し

廣畑　育子

春浅し竈（くど）に荒塗りしたる跡
一山の恥じらひ色に芽吹き初む
裸木の空のプラチナ細工かな
煙出し覗くや冷えの走り来て
草の根の起されてゐる春田かな

PDF= 俳誌の salon

雪樹集

八千草

赤松有馬守破天龍正義

一斗缶の中で燻るどんどかな
大試験向ふ少女の足太し
八千草に芽吹きの匂ひ吹いてをり
古雛と呼ばれるまでの歳月よ
時節だけ開ける店なり雛の市

蠟梅

田尻　勝子

春雨やローズマリーを扱きやる
靴にあるジーピーエスや五月晴
お習字の半紙空ゆくどんどかな
新春や優しいですよと婿の言ふ
蠟梅を渡されれ一人になりにけり

PDF= 俳誌の salon

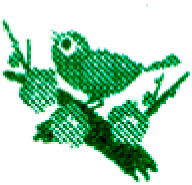
蛍雪譚

二十七年五月号鑑賞

六甲選

主宰が句会で誉めてくれたのに、誌上ではあまり評価してくれないのはなぜか、主宰の基準がその場しのぎで揺れているのではないか、という声は六花ばかりでなく他結社でもよくある。ではなぜなのか。一言で言えば「霽」と「褻」の違いである。ハレ？ケ？って何？と思う人も多いだろう。この事を提唱したのは復本一郎で、（昭和五九年十二月号の角川「俳句」に詳しいから、参照いただきたい）ざっくばらんにいえば、「褻の俳句」とは仲間内で分かる句、つまり句会や祝賀会、吟行会などで出た句。その場に居た人はよくわかる（通じる）が、居なかった人には判りにくい（通じにくい）句。一方「霽の句」は公に発表する句で、句集や俳誌合同句集など活字にして載せる句。復本氏は「個々人が責任を持って普遍性を獲得し得ている句」ということになる。従ってここに六甲が批評するのはハレの句としてどうかという基準をもとに書いており、中にはケのことも触れて書くこともある。六花はすでに公の俳誌であるが、各個の作句技術を向上させる役目もあるはずなので、句会で物言うような書き方にもなっている。従って作者は常に、ハレの句としてかケの句として主宰が書いているのか自らが聞き分けていただきたい。私は俳句は上達しなくても句会に参加するだけで、投句するだけで楽しいと思う人はこの限りではない。

PDF= 俳誌の salon



遠天に雪の嶺あり登り窯

笹村　政子

遠天は遠い天のこと。天の遙か彼方に雪の嶺を認めた。目の前には登り窯があるという句。上五をどのようにするかあれこれと工夫してみたに違いない。その工夫が却って読者を惑わす。「えんてん」という音がどうしても「炎天」に繋がってしまうのである。芭蕉の言う「舌頭に千転せよ」がある。なんども口に出して唱えている中に気が付く場合もあろう。その努力はしたのだろうが、この句の場合遠くのことをどう表現するかは作者の抽斗の中にある数によって決まる。手法としては遠景を言って点前の物を言う、遠近法を使った。大きな景色だけに句に嫌味や理屈がないから、推敲を重ねて仕上げていけばいい。〈以下略〉

PDF= 俳誌の salon

六花集

五月号

平居澪子

谷川に楔を打てる凍り滝
旅人の磁針狂はす大枯野
悴める手を差し出せる和解かな
風花のはるかかなたに朱雀門
雪片の塔の礎石を濡らし消ゆ

秋田典子

左義長の祝詞の声の通りけり
とんど待つ中に久しき顔ありぬ
濛々と風下隠すとんど焼き
バーナーを振りて始まる堤焼き
淡雪を他人の夫と眺めをり
土雛の鼻欠けてをり骨董屋

延川笙子

雛の軸連ねて女系家族かな
千代紙の雛を折るにも友の亡く
願ひ込め陶雛飾る娘無く
夢うつつ雛あられ曳く鼠かな
いくたびも寺に詣でて梅見かな